

■ PCN だより

PCN Volume 63, Number 4 の紹介 (その2)

先月号では、2009年8月発行のPCN Vol. 63, No. 4に掲載されている海外からの論文について内容を紹介した。今回は、日本国内からの論文について、著者にお願ひして日本語抄録をいただき紹介する。

Regular Article

1. Correlation between a reduction in Frontal Assessment Battery scores and delusional thoughts in patients with Alzheimer's disease
T. Nagata, K. Ishii, T. Ito, K. Aoki, Y. Ehara, H. Kada, H. Furukawa, M. Tsumura, S. Shinagawa, H. Kasahara and K. Nakayama

アルツハイマー病における Frontal Assessment Battery (FAB) スコア低下と妄想の関連性

【目的】本研究において、初期アルツハイマー病患者の妄想的観念(妄想, 妄想的誤認症候群)と前頭葉機能との関連を調べるため、ベッドサイドでのスクリーニング神経心理検査;日本語版 Frontal Assessment Battery (FAB) を用いてみた。【方法】48名のアルツハイマー病患者(MMSEスコア \geq 18点, CDR=0.5 or 1)を介護者からのインタビューで妄想的観念があるグループ(n=19), ないグループ(n=29)で2群間におけ FAB の全スコアと下位スコアを比較した。【結果】2群間において FAB 全スコア($P < 0.01$)と下位スコア(類似性, 運動系列, 葛藤指示; $P < 0.05$)で有意差を認めた。また, 多重回帰分析においても妄想的観念の出現に FAB 全スコアの有意な関連性を認めた。【結論】アルツハイマー病患者における妄想的観念の出現に, エピ

ソード記憶障害に加え, 遂行機能を含む前頭葉機能を反映しているであろう, FAB スコアの有意な低下が関与していることが示唆された。

2. Correlations among self-esteem, aggression, adverse childhood experiences and depression in inmates of a female juvenile correctional facility in Japan

N. Matsuura, T. Hashimoto and M. Toichi

日本の女子小年院在院者の, 自尊感情, 攻撃性, 逆境の児童期体験及び抑うつ傾向の関連性

本研究の目的は以下の2点の仮説を検証することである。深刻な女子非行化群において, ①自尊感情や攻撃性, 逆境の児童期体験及び抑うつ傾向は相互に関連しているのではないかと, ②強い抑うつ傾向を示す者は, その他の要因が複雑に絡まって, 抑うつ傾向を高めているのではないかと。

対象群は, A女子少年院に2005年11月~2006年12月に入院した91名(全員女性)であり, 年齢層は15~19歳, 平均年齢は17.0歳(標準偏差1.18)であった。抑うつ傾向において, 低い自尊感情の有意な主効果が示された($\beta = -0.41, < 0.001$)。同様に, 抑うつ傾向において, 高い攻撃性の有意な主効果も検出された($\beta = 0.21, < 0.05$)。本研究結果より, 自尊感情, 攻撃性, 逆境の児童期体験及び抑うつ傾向が相互に関連していたことが明らかとなった。低い自尊感情は, 他の様々な要因に強い影響を与えることが示唆された。

3. Intrasubject reproducibility of prefrontal cortex activities during a verbal fluency task over two repeated sessions using multi-channel near-infrared spectroscopy

Y. Kakimoto, Y. Nishimura, N. Hara, M. Okada, H. Tanii and Y. Okazaki

多チャンネル近赤外線スペクトロスコピーを用いた言語流暢性課題中の前頭葉機能における2回の計測間での被検者内再現性について

【目的】認知課題遂行中の前頭葉機能について、2回の計測間での被検者内再現性と被検者の精神的健康度を評価する。【方法】我々は近赤外線スペクトロスコピーを用いて、20人の健康成人に対し2ヶ月間の計測間隔において文字流暢性課題中の酸素化ヘモグロビン濃度長変化量 ([oxy-Hb]) を測定した。2回の計測において状態-特性不安検査 (STAI), Zung 自己評価式抑うつ尺度 (Zung SDS), 気分プロフィール検査 (POMS), パーソナリティ検査 (NEO-PI-R) を用いて被検者の精神的健康度を評価した。それらの得点と文字流暢性課題遂行中の [oxy-Hb] との関連について検討を行った。【結果】文字流暢性課題の成績は2時点間でほぼ同等であり、課題中における前頭葉の賦活はほぼ同じ領域に全体的に見られた。反復測定の信頼性については、[oxy-Hb] の級内相関係数は信頼しうる値であった。また2回の測定における被検者別の全チャンネル総加算平均波形の相関係数も許容値を示した。様々な質問紙によって測定された精神的健康度は正常範囲内であり、数個のチャンネルを除いては前頭葉機能との相関は見られなかった。【考察】今回の結果から、被測定経験はごく一部の領域を除いてほとんど影響を及ぼさないことが示唆された。多チャンネル近赤外線スペクトロスコピーを用いて測定された認知課題遂行中の前頭葉機能は、精神的に健康な被検者においては2ヶ月の計測間隔について再現性が確認された。

4. Subjective assessments of the quality of life, well-being and self-efficacy in patients with schizophrenia

B. Chino, T. Nemoto, C. Fujii and M. Mizuno

統合失調症の患者におけるQOL, 健康・幸福感, 自己効力感の主観的評価

【目的】統合失調症の同一集団において3種類の主観的評価尺度を検査し、尺度間の相関や背景情報との関連を分析した。【方法】統合失調症の患者36名に対し、主観的評価としてthe 26-item short form of the World Health Organization Quality of Life (WHO QOL 26), Subjective Well-being under Neuroleptic drug treatment: Short Japanese version (SWNS), Self-Efficacy for Community Life scale (SECL), 神経心理検査5種類, 臨床症状としてPositive and Negative Syndrome Scale (PANSS), 社会機能としてsocial functioning scale (SFS), global assessment of functioning scale (GAF) を調査した。【結果】PANSSにおける妄想(陽性症状), 不安と抑うつ(全般的な精神病理)の評点がWHO QOL 26およびSWNSの評点と有意に相関した。一方, 陰性症状は主観的評価と相関しなかった。SECLも臨床症状と相関しなかった。SFSとGAFは主観的評価と有意に相関した。3種類の主観的評価尺度はお互いに相関した。【結論】それぞれの尺度は異なった特徴を持つため, 期待される治療の効果や検査の目的に基づいて使用されるべきである。そして患者への治療は心理・社会的な問題を改善し, 社会機能やQOLを高めるように提供されるべきである。

5. Autonomic nervous system activity and psychiatric severity in schizophrenia

M. Fujibayashi, T. Matsumoto, I. Kishida, T. Kimura, C. Ishii, N. Ishii and T. Moritani

統合失調症における自律神経活動と精神症状

【目的】統合失調症患者の死亡率は一般人口と

比較して2~3倍高いが、本疾患における自律神経活動動態は十分に明らかにされていない。そこで本研究では、統合失調症患者の自律神経活動について、まず健常者との比較を行い、次に、アメリカ精神医学会における機能の全体的評価尺度であるGlobal Assessment of Functioning (GAF)を用いた精神症状の重症度により患者を2群に分けて比較検討した。【方法】71名の統合失調症患者と72名の健常者を対象とした。自律神経活動は心拍変動パワースペクトル解析を用いて分離・定量化した。【結果】統合失調症患者の自律神経活動は健常者と比較して極度に低下 ($p < 0.01$) していた。次に、患者をGAF-Low群とHigh群に区分し比較した結果、Low群の総自律神経活動 ($p = 0.033$) および副交感神経活動 ($p = 0.025$) は有意に低下していた。さらに、Low群とHigh群について、年齢、性別、BMI、向精神病薬投与量および脂質プロフィールを共変量とした偏相関分析を行ってもなお総自律神経活動および副交感神経活動は有意な低下を認めた。【考察】GAF-Low群に自律神経活動の有意な低下を示した本研究結果から、精神症状の重症度と自律神経活動とは深く関連している可能性が示された。また、統合失調症患者における自律神経活動の低下は、突然死など心血管系疾患のリスク増大にも影響を及ぼしている可能性が併せて示唆された。

6. Association between the dysbindin gene (*DTNBP1*) and cognitive functions in Japanese subjects

R. Hashimoto, H. Noguchi, H. Hori, K. Ohi, Y. Yasuda, M. Takeda and H. Kunugi

日本人におけるディスバインジン遺伝子 (*DTNBP1*) と認知機能の関連

【目的】ディスバインジン遺伝子 (dysbindin: dystrobrevin binding protein 1: *DTNBP1*) は統合失調症の脆弱性遺伝子の一つである。統合失調症の脆弱性遺伝子は、統合失調症の認知機能障害に影響を与えると考えられている。今までにデ

イスバインジンの統合失調症のリスク遺伝子多型が、記憶や知能と関連することが報告されている。しかし、リスクと関連しない多型については検討がなされていなかった。【方法】ディスバインジン遺伝子の日本人では統合失調症のリスクとは関係ない一塩基多型 (rs2619539: P1655) と記憶や知能との関連を、日本人の70名の統合失調症患者と165名の健常者にて検討した。【結果】この一塩基多型は、ウェクスラー記憶検査の言語性記憶と一般記憶と関連し、ウェクスラー知能検査の下位項目である単語、類似、絵画完成と健常者において関連が認められた。一方、統合失調症患者では記憶、知能ともに関連が認められなかった。【結論】統合失調症のリスクとは関連しない一塩基多型は、健常者において知能や記憶などの認知機能と関連することが示され、ディスバインジンが認知機能に影響を与える遺伝子であることが示唆された。

Short Communication

1. Characteristics of elderly people using the psychiatric emergency system

E. Sawayama, M. Takahashi, H. Arai, K. Nakajima, A. Kano, T. Sawayama and H. Miyaoka

精神科救急における高齢者の実態

老年人口の増加に伴い、精神科救急の領域においても高齢者対策が求められるが、その実態についての報告は少ない。そこで自傷他害のおそれ警察官に保護され、北里大学東病院で対応した警察官通報ケースのうち、65歳以上の高齢患者について後方視的調査を行った。その結果、主診断では有意に器質性精神障害 (F0)、感情障害圏 (F3) が多く、統合失調症圏 (F2) が少なかった。副診断や主要症状では認知症、意識障害が有意に多く、精神運動興奮が有意に少なかった。身体合併症は有意に多かった。精神科通院歴、入院歴が有意に少なかった。また自殺企図に関しては感情障害圏の高齢患者で有意に多かった。以上より、警察官通報となる高齢患者の特徴は認知症を

含む器質性疾患に重なっておこる問題行動と、感情障害圏患者の自殺企図であると考えた。今後は警察官通報となる前に高齢患者と精神医療をどう結びつけるか、救急システムの中で身体疾患にどう対応するかが課題であると考えた。

2. Psychiatric and psychological outcomes of Japanese living donors following liver transplantation

N. Shibata, H. Shimazaki, N. Sano, S. Kawasaki and H. Arai

本邦における生体肝移植術ドナーの術前後の精神医学的、心理学的状態について

順天堂大学医学部附属順天堂医院において

2005～2007年に施行された生体肝移植術のドナー6症例の精神医学的、心理学的状態の評価を行った。術前後の心理学的評価はPOMSとSTAIにより行っている。POMSの結果からは、術前に比較して術後において怒り・敵意のスコアが有意に減少していた。STAIでは同様に、術後に不安・抑うつスコアが有意に減少していることが明らかとなった。本研究は少数ドナーでの検討であるが、術後経過が良好であること、移植術に関わるスタッフの心理的サポートが術後の心理状態の安定に寄与していると考えられた。我々は、今後さらに長期間の生体肝移植術ドナーの精神医学的、心理学的経過を追うことにしている。

(精神神経学雑誌編集委員会)